

人生のあゆみと共に チーズの世界の 素晴らしさを実感!

末澤和政さん

(2008年シュヴァリエ叙任 2018年オフィシェ叙任)

【プロフィール】

1948年東京生まれ。1972年東京大学経済学部卒業、日本興業銀行(現みずほ銀行)に入行。営業第六部長、広報部長を経て、2001年同和鉱業(現DOWAホールディングス)に移籍、2006年副社長に就任。2008年藤田観光代表取締役社長、2013年会長に就任。相談役を経て2015年退任。

現在は主として家内の小間使い(ご本人弁)。



猛暑が続く8月の昼下がり、末澤さんと渋谷でお会いした。あの暑さにも関わらずジャケットをお召しになり、温厚でゆっくりとした上品な語り口はまさに日本の紳士という感じで「騎士のシルエット」に相応しい印象だった。1時間ほどのインタビューであったが、末澤さんの人生の歩みやビジネスフィロソフィーを切り口に、チーズとの関係性のお話など貴重な示唆を受け、価値ある時間を共有させていただいた。



ホテル椿山荘でお客様をお迎えしているところ

◎20歳まではチーズよりはバター

末澤さんの最初のチーズとの出会いは小学校入学前の幼少期の頃である。その頃は、雪印プロセスチーズがチーズだと思い続けており、チーズよりバターのほうが大好きだったという。チーズは石鹸のようなものという印象を持っていたそうだ。

当時、末澤さんは「チーズはバターを作ったあとにできる」と聞いていて、それならバターのほうの値段が高いのはなぜだろうと思っていたという。そして、少し大きくなってデュマの「ダルトニアン物語(三銃士)」を読んだとき、硬いパンとチーズをもって出かけるという一説に、「こんなおいしくないものをなぜ持って行くのだろう、フランスは不思議だな」と、違和感を抱いたという。

◎衝撃のナチュラルチーズとの出会い

末澤さんが大学生のころ、8歳年上のお兄様がスイスの病院で医者

として働いていた。年に1回ほどスイスから帰ってくるそのときに、大きな塊でチーズを持ってきてくれたそうだ。その中でも印象的だったのがマスカルポーネとゴルゴンゾーラをサンドイッチのように重ねたチーズだ。縦に切って恐る恐る食べてみた、そのときの美味しさは今でも忘れられないという。そしてお兄様から「食事の後に、チーズを食べるととてもうまいぞ」ということも教わり、それまで食べていたチーズとは全然違うことに驚くとともに、そのときからナチュラルチーズの美味しさに惹きつけられてしまったという。

その後毎年、お兄様が持ってこられるチーズを楽しみにしていた末澤さんは、ヨーロッパの美味しいチーズを発泡スチロールに入れて、においが漏れないようにぐるぐる巻きにして、スーツケースで運んでくれていたお兄様には感謝しかないという。

◎チーズとの更なる結びつきは藤田観光社長時代

末澤さんは東京大学を卒業後、日本興業銀行(現みずほ銀行)に入行されその後、非鉄金属の同和鉱業に移籍された。そのあとに藤田観光に行き、サービス業であるので様々なお客様に会うためワインなども業務上必要があり、勉強した。

そんなある日、本間み子さん(現フェルミ工会長)が主宰しているチーズの会で、エポワスに出会った。刺激は強いがウォッシュ系のチーズの魅力も発見した。そして本間さんの「野菜や魚、肉などの食べ物は命を犠牲にしている。でもチーズは、子どもを育てようとする母親の、ミルクのあまったものをいただいているという食べ物なのだ」という話を聞き、チーズはただの美味しいもの、というだけでなく、とても深いものだという意味で2度目の衝撃を受けた。他者の命を犠牲にせず、余り物をいただいている、という説明になるほどと思ったという。そしてそのご縁で2008年にシュヴァリエになった。

◎ビジネス経験の本質を学んだ銀行時代

末澤さんは業種が異なる3つの企業を経験している。銀行、鉱業、観光と仕事は変わったが、お客様が何を必要としているかを考えるというのは同じだと思ったそうだ。

これは、銀行時代に先輩から「仕事は井戸を掘ることと同じ」と言われたことがヒントになっている。先輩の話はこうだ。

「井戸を掘っていくと、水が出てくる。でも、ここで安心するだけでなく、更に違うところで井戸を掘れ。新しいところは地盤も違うので、道具が変わる。そうしてまた水が出る。これを3回、4回、5回とやっていくとやがて気が付く。下を流れている水は同じだ、ということ。」

当時の末澤さんにはこの話がピンと来なかったが、どうやったらお客様に受け入れられるかを考えることは、どれも同じだと、だんだんわか

るようになったという。そしてそれを聞いたときには、なんとなく、「そういうものなんだな」と思った程度だったのが、今となってはズーンと響いてくるそうだ。

◎今年の総会で理事に就任、抱負を伺った

末澤さんは、理事になって正直、理事の皆さんがこんなに一生懸命取り組んでいることにびっくりしたという。

「皆さん、それぞれの仕事を持ちながらもこの会の理事の仕事に一生懸命取り組み、意見も活発に出て、総会・叙任式ではバッとまとまる。事務局の方も一生懸命やっつけらっしゃるし、素晴らしいなと思いましたね」。

これからの抱負を伺うと、「会員の方がもっと気軽に集まれて、会員の方同士の交流があるといいのかなと思う。総会も、もっとたくさんの方が参加されて、『こうしたい』という意見が出るような会になるといい。そして、出るメンバーがあまり固定化されない方がいいと思う。新入会員の方がなじみやすいようにできるといい」ときっぱり。

◎結びに、末澤さんのプライベートも少し伺ってみた

質問で趣味のことを聞かれるのが一番つらいとか。

「敢えて言うなら旅行、ワイン、お酒を飲む。読書は乱読」。基本は何もしないで楽しめるのが一番好きとのこと。「努力するのが嫌。朝起きて、何も予定がないと、本当に幸せ」と言い切る。

末澤さんがこのような言葉を発した背景には、恐らく団塊世代として、企業のビジネス戦士として、さらに戦う経営者として遣り尽くした末澤さんならではの達成感や努力の結晶が、今のフリーな立場で言わしめているような、意味の深さがあった。末澤さんの経営者として人間としての大きさを感じ、改めてその素晴らしさに脱帽しました。

(取材・文責 大塚)



お客様のパーティーに呼ばれて



ホテル椿山荘でお客様をお迎えて



フランスに休暇で行き、ノリの雰囲気を楽しんでいる(セーヌ川河畔の市場)